

本書が「政治学」ではなく、「現代政治学」というタイトルを冠しているのには理由がある。目次をみても明らかなように、本書は「政治学」の教科書という性格をもっているが、政治思想史も地方自治も取り扱ってはいない。たとえば、政治思想史の対象が古代のアリストテレス（Aristotle）の時代に遡ることを考慮して、それでは古すぎて現代の政治とはいえず、現代政治学の対象にはならないからというわけではない。

たしかに、本書が取り扱うのは現代の政治であり、具体的には、選挙や政党、利益集団、有権者や政治家、議会、内閣、司法、官僚、政策などである。政治についての日々のニュースなどで目にしたり、耳にしたりするようなテーマが本書の至るところで論じられている。読者は、今の政治についての知識があるか否かに関わりなく、政治学がどのように現実政治を説明できるのかについて学ぶことができるであろうし、現実政治が政治学を通してクリアに理解できることを知ることにもなると思う。

そのための設計として、本書の構成は、20世紀を代表する政治学者のイーストン（David Easton）による政治システム論を念頭に置きながら、環境、インプット（入力）、政治システム、アウトプット（出力）、フィードバックという一連の政治過程に沿っている。もちろん、政治システム論そのままというわけではないが、政治がどのように動いているのかをイメージしやすくするために、政治の流れを意識した構成となっている。

現代の政治学は、20世紀に「科学的」な政治学として、それまでの政治学とは一線を画している。それだからこそ、本書においては、政治思想史や地方自治について取り扱ってはいないのであり、もしも本書に政治思想史や地方自治のトピックを求めるとしたら、現代政治学だけでなく政治学そのもののさえも理解していないことになる。現代政治学の特質については、本書の第1章で述べているが、現代政治学は、政治という対象を明確に定めるとともに、厳密な用語を使用し、方法論的にも社会科学における一つの下位分野であることを明確に意識している。

現代政治学が具体的にどのような学問であるのかについては、本書の第1章から順に読み進めていくことで、だいたいの特徴を理解できるであろうし、面白さも感じられると思う。本書は、法律文化社の田引勝二氏の企画により「18歳から」シリーズの一冊として編まれたが、章の構成やレイアウトなどの統一に際して、執筆者各位の前向きな協力とともに、田引氏のきめ細やかな編集により刊行が実現した。関係各位に衷心より謝意を表したい。

2025年10月20日

岩崎正洋